する諸般の事象に對する史的研究の集積である。しかも、そこに取り上げられた問題は、古くは周代から新らしきは現代に迄及び、中國を主要舞臺としてアジア佛教圏の大部分を含む、というように、長期、かつ廣範圏の中に分布している。まことに、中國佛教史を中核とする、佛教史學の一大叢林たるの感が深い。斯學に志を有する者にとつて、はたまた、佛教に心を寄せる人々にとつて、實に價値多い一書と言うべきものである。

昭和三六年二月、塚本博士頌壽記念會刊、B五・一〇六五頁、價三五〇〇圓

（滋野井）

傳燈の聖者 ―眞宗七高僧傳―

藤島達朗・野上俊靜編

親鸞聖人七百回遠忌に當つて、いくつかの出版がなされたが、本書も、その一つである。副題の示すように、親鸞聖人の思想形成に多くの影響を與えたインド、シナ、日本の七人の高僧の傳記を類聚、編纂したもので、正しく聖人の遺德讃嘆の微志にほかないであろう。從來、これらの僧傳は、教義研究の一端としてなされ、しかも新しい研究は、高僧の個々にとどまり、七人をまとめ論述されるものはなかつた。從つて、最近とみに進んだ歴史學の研究成果をふまえて、七高僧を歴史的背景の中に、ヴィヴィッドにえがき出すということは、なおさら、皆無であつた。本書は、このような從來の學究の不足分に對する要望に答えたものであり、まさに時宜を得たものといわねばならぬ。本書の成り立ちは、

龍樹・天親　佐々木教悟
曇鸞　野上俊靜
道綽　間野潛龍
善導　滋野井恬
源信　名畑崇
源空　北西弘

の如く、大谷大學佛教史學科の教授、助教授のほか、講師、助手の新進諸氏も加わり、七祖をそれぞれ分擔、執筆されている。内容、文體ともに、繁簡、硬軟はあるが、ヴァラエティがあり、かえつて興味ぶかく讀ませてくれるであろう。

上記の七高僧傳に續いて、藤島達朗教授の「七高僧畫像について」がのせられている。卽ち、七高僧畫像の成立、變遷を、廣い眼幅から、簡潔、明瞭に論述されている。故日下教授以降、これらの研究の適確なものを見なかつただけに、向後の眞宗史研究にとつて好箇の指針となる解説といえる。また、これによつてそれぞれの高僧傳が正しく、きりとしめくくられたといえよう。最後に、親鸞聖人の仰慕した聖德太子の小傳が付せられてある。眞宗においては太子、七高僧と一具にされ、安置されるところから、當然とはいえ、誠に適切であり、むしろ七高僧並みに論じてもよかつたとさえ思われる。尙、各僧傳の間に、親鸞聖人の高僧和讃が、それぞれ、はさまれ、聖人の教義形成における各高僧の位置を示す役割を果している。また卷末、七祖在世年表は便利である。小型本ながら、歴史家による僧傳研究として注意されるものである。

昭和三六年四月、A5版、本文二八七頁、圖版一、京都、平樂寺書店

（堅田）